○ こまちなみシリーズ ⑮

尾道本通り～中世から続く箱庭的都市･尾道～

林芙美子像

「海が見える　海が見えた　五年振りに見る　尾道の海は懐かしい」、林芙美子の「放浪記」の有名な一節である。芙美子は１３歳から１９歳まで義父、母と三人で尾道に住み、二人の恩師によって、その文学的才能を見出された思い出深い町である。

ＪＲ尾道駅を降りて東へ２、３分のところにある林芙美子像を起点に一番街、中商店街、本通り商店街…と続く東西に貫く１．５キロ。レトロな雰囲気漂う商店街が「尾道本通り」である。

尾道本通り

尾道は中世以降、北前船の寄港地として物資の集散地として栄えた商都である。明治時代にはいち早く銀行、商業会議所(現在の商工会議所)などがつくられ大いに栄えた。

尾道本通りは千光寺山裾に沿って走るＪＲ山陽本線、国道二号線の南側に位置している。そぞろ歩くと、本通りから尾道水道に向かって枝葉のように小路がある。１８もあるそうで、その道幅も２ｍ位のものから人ひとりやっと通れるものまで…。渡し場通り、荒神堂通り、浜の小路などがあるが、もっとも狭いのが「あなごのねどこ」。小路の多いことについて観光協会の方は「昔は間口で税金が掛けられたので、間口は狭く、奥行きがある家が建てられたためでしょう」と、出入りに便利なように小路がつくられたのだそうだ。そういえば古い家並の残る三次もそうだった。

刃物を扱う店に入ってみた。４５０年の歴史があるそうで、美術刀剣から実用刃物を扱っている。「広島でこういうお店、見かけなくなりましたね」「そうですね。良いものをお求めの方は遠方からお見えになり、研ぎのため宅配便で送ってこられますよ」、私も小振りの包丁一本買い求めた。かつて銭湯だったところが菓子、雑貨など土産物を扱い賑わっている。お茶屋さん、呉服店…、バラエティに富んだ店が並ぶ。珈琲店もスタバやドトールなどは見当たらず、広島にも進出している元気な珈琲店もある。自転車屋を改装して小物を扱うお店の店主は２０代の女性、手作りの品を求めて観光客も足を運ぶ。

あなごのねどこ

尾道は文学そして映画の町。地方都市では映画館が無くなったが、本通り入口に「シネマ尾道」がある。ラインアップをみると「オケ老人」「シュガー・ブルース」「狂い咲きサンダーロード」など、ちょっとマニアックなものが多い。古くは小津安二郎の「東京物語」、尾道出身の大林宣彦の「転校生」「さびしんぼう」「時をかける少女」尾道三部作のロケ地になっている。最近はフジテレビの「月九ドラマ」のロケが行われたため、若い人の

観光客が増えているそうだ。因みに２０１５年の入込客は６７４万人。
　お昼時だったので海の近くの鮨などの和食の店に…、やはりネタが新鮮、美味しい。暫くしてアジア系のお客､春節休みで香港から来た二人連れ｡すると女将さんが i-pad を二人の前に、これを見てもらい注文を受けるのだそうだ。昨年の外国人客は２１万人、電子マネーが使えるお店も増えている。
　尾道は山陽道、中国横断自動車道、しまなみ海道（サイクリストの聖地になりつつある）が交差する「瀬戸内の十字路」、サイクリストの宿として倉庫を改装したＵ２…、尾道水道に面した雁木などは姿を消し、海岸線は護岸工事で綺麗な遊歩道に衣替えしている。
　雁木のない尾道は小津の世界が消えたようなもの、あの１．５キロの尾道本通り、さびれていく運命にあるとしたら…、是非古きものも残って欲しい、と願うのはよそ者の独りよがりだろうか。

（編集委員　三宅恭次）

第２９号（平成２９年５月１５日）

○ こまちなみシリーズ ⑯

旧海軍の町･呉～空襲を受けた街にこまちなみはあるのか？～

　呉って軍都、軍港の町、敗戦前に空襲を受けたし、こまちなみってあるのかな？と思いながらも何の下調べもせずにＪＲ呉線の快速ライナーに乗った。
　３０分で呉着、まずは観光協会で話を聞こう。今は便利な時代、スマホに「呉観光協会」と入力すると道順表示、連れて行ってくれる。
　「スミマセン」、窓口で声を掛けるとパソコンを打っていた男性がこちらを向き「何でしょう？」、これこれ云々…問い合わせの主旨を告げると、「呉の中心部は空襲を受けて古い町並みは残っていませんよ」と言いながらも、大ヒット中の「この世界の片隅に」のロケ地マップを持って来て、「ここから歩いて１０分のところ、長ノ木に国の重文・澤原邸がありますよ」と、そこに帰ってきたのが観光協会の広報担当の平田己恵子さん。代わっていろいろ話を聞くことができた。

「この世界の片隅に」ロケ地マップ

澤原家住宅

灰が峰の山裾の長ノ木一帯は中心部から離れていたため
空襲の被害を免れた。澤原家は１８世紀半ばのもので、現在も子孫が住いしている。改築修理も最小限にとどめているため、当時の姿をほぼそのまま留めている。
実はこの澤原邸の前を通る道が、明治初年まで広島と呉を結ぶ唯一の道であったという。普通車一台がやっと通れる道、今は舗装されているが、ここを浅野の殿様がこの地区視察のため往還、澤原家を宿にしたそうだ。残念ながら、他の家並は残っておらず、澤原家以外、往時を忍ぶものはない。

澤原家への道

平田さんから呉の町の成り立ちを聞くことができた。
呉は明治１７年（１８８４年）に軍港設置、鎮守府が置かれることが決まるまでは半農半漁の寒村であった。むしろこのあたりの中心は人口２千人の宮原村だった。しかし、その後は軍施設とともに街づくりが急ピッチでおこなわれた。碁盤の目状の区割りはその当時の名残である。街づくりに人夫、軍施設に軍人、軍属が全国から集まり、明治３５年には市制が敷かれ、明治の終わりころには川原石―呉駅―四道路―本通りに路面電車が広島より早く走った。人口も昭和に入ると４０万人を超えた。
平田さんは「中心市街地は空襲ですべて焼けたが、その当時の賑わいを感じることができるのが、この『呉まちあるきＭＡＰ』です」と、そこには中通りの鈴蘭灯、本通りの映画館「世界館」、呉市初のデパートメントストア「山下百貨店」、そして明治末期に開業した木造のビアガーデン…、平田さん「ここに入っていた飲食店が今でも中通などにありますよ。カレー、肉じゃがのいせ屋さんなんか…」。

田舎洋食いせ屋

私は帰路、田舎洋食いせ屋に入った。店には「まちあるき」の写真と同じものが壁に飾ってあった。肉じゃが、ハヤシライス、それに瓶ビールを注文。それとなく主人に話しかけると「私は三代目です。じいさんが軍艦でコックをしていたのですが、第一次世界大戦後の軍縮条約で乗船艦が無くなり、オカに上がり店を始めたんですよ。１９２０年です。次の東京オリンピックで１００年ですよ。」「いせ屋の屋号は…？」「じいさんの出身が三重県なもんで…」、恐らく呉市内には全国から集まった子孫が家業を継いでいるだろう、と思われる。そういえば呉の千福が海軍御用達のお陰で全国ブランドになったが、それについていせ屋の主人は「軍艦に色々な銘柄の酒を積み込んで航海を終えて帰ってきたとき、他は酢になっていたそうですが、千福だけは『お酒』だったそうですよ」。

れんが通り

中通り、れんが通り、本通り…、今やあまりに寂れている。呉の人口は周辺の町との広域合併を経た今でも２３万人に過ぎない。
平田さん「街並みを取材されるのであれば、両城地区の二百階段、百階段、映画『海猿』のロケ現場にもなりましたね。将校の洋館が残っています。それから川原石地区、ここには建築関係の方にとっても興味深い家並が残っていますよ」と。

平田さんは呉生れの呉育ちだが、５年間のアメリカ暮らしで多様な人種に触れたことで「大きく変わった」と。「呉の人が呉を知らなさすぎる。街を元気にするため『シビックプライド＝地域への誇り』を育てる」とエネルギッシュに動き回っている。

（編集委員　三宅恭次）

○ こまちなみシリーズ ⑰

～竹原･町並み保存地区～

広島バスセンターから「かぐや姫号」に乗って１時間２０分、ＪＲ竹原駅前に着いた。乗客８人、観光客らしき者は私一人。降りて目に入ったのが「観光案内処」、戸を開けて入って「あの、街のパンフ…」と言いかけたところ、中年女性職員が「町並み保存地区に行かれるのですね。ハイ、これが案内地図です」と黄色の蛍光ペンを持って「はい、この前の信号を渡って、商店街を真っ直ぐ行って角に酒屋があります。そこを右へ行ってください。川を渡ったところに『道の駅たけはら』があります。その北側、山に沿った一帯が保存地区です」「やはり『マッサン』の放送の頃に比べたら観光客は減っているのですか？」「さあ、私、最近ここに来たので…、まあ少なくなっているでしょうね」、と意外とそっけない。平日、商店街といってもシャッター通りに近い。言われた通り道なりに行ったところが酒屋がない！後でわかったのだが、実は三叉路を左に行くのだったのだ、という次第でまたまたグーグルマップの手助けで保存地区に辿りついた。

案内図

竹原は室町時代から瀬戸内の交通の要衝として栄えた。京都の下鴨神社の荘園、戦国時代は竹原小早川氏、江戸時代に広島の浅野藩の領地となる。江戸期後半から製塩業と酒造業で栄えた。その頃の豪商の邸宅が町並み保存地区に残っている。

保存地区（国の重要伝統的建造物群保存地区）は国道１８５号の北、本川と寺山に囲まれた一帯である。

まず全体を見るため、保存地区の真ん中あたりにある西方寺への石段を上がる。京都の清水寺を模して造られた「普明閣」から見下ろすとまさに“京の町屋群”、黒く光る瓦屋根が美しい。

全景

保存地区はメインの本町通りと道幅が狭く漆喰壁が往時を偲ばせる大小路、製塩業の盛んな頃は盛り場として賑やかだった板屋小路などからなる。

本町通り

本町通りは北の胡堂から旧笠井邸まで、一キロ、もう少しあるか…、山に沿って緩やかに湾曲している。「どうぞ、お入りください」と言われて笠井邸に上がる。明治５年に建てられた浜主（製塩業）の家。ＮＰＯで管理しているそうだ。二階に上がると、それは見事な「梁」、牛梁と言うそうだ。大木の曲がりもそのままに梁として使っている。

「持ち主のおられない方も多いのですか？前の角の家も貸家の紙が貼ってありましたが…」「そうですね、持ち主が広島、東京などへ出ておられる方も…」

この地区で指定された家屋は固定資産税の優遇措置もあるが、修理する場合は届け出が必要、その代わり助成金も出るとのこと。

大小路

笠井邸で話をしていると、ピンマイクを付けて「こちらが松坂邸です」と説明する女性の声が聞こえる。外へ出ると観光客１０数人の一団だった。わたしも加わって聞く。

「本町通りは江戸後期の道幅、そのままです。その当時としてはたいへん広い!今でも普通車がすれ違うことができます」、なるほど確かに広い！府中の銀山街道などは軽がやっと一台通れる幅だった。

旧笠井邸内部

「ここがＮＨＫの朝のテレビ小説『マッサン』のモデルになった竹鶴政孝の実家。竹鶴酒造です。この石畳の道で島爺役の高橋元太郎が朝、打ち水をする。そこへ主人公、亀山政春役の玉山鉄二が帰って来る、あのシーンですね。わたしも見ましたよ」。

竹鶴酒造正面

竹鶴酒造は元は製塩業、江戸期に酒株を持って酒造業を始めたそうで、建物も江戸期から明治期までの棟が現存する。江戸期は低く段々と高くなっている。江戸期の建物には二階にも格子が嵌められてる。瓦も古い時代の建物は棒瓦屋根。

竹原格子と言われる格子は各家にあるが、その当時の大工の遊び心も見られる。ハート状のものがある。これはどうもオランダから入ったトランプからヒントを得たのではないか…、ガイドさんはそう説明していた。

わたしは遅い昼飯を醤油屋さんの経営するお好み焼き屋へ。「竹原焼」というそうだが、やはりお好み焼きは広島だ！

帰りのバスはなぜか１時間１０分で広島に着いた。

（編集委員　三宅恭次）

第３１号（平成２９年９月１５日）

○ こまちなみシリーズ ⑱（総集編）

金沢市はまちの歴史を色濃く残した、ちょっとした町並みを「こまちなみ」として守り、育てるまちづくりを進めている。これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、紹介してきたが、最後に取りまとめを行う。

☆こまちなみの分析

これまで紹介してきた「こまちなみ」は、西国街道(旧山陽道)、雲石街道、銀山街道(石州街道)などの古い町並みが少し残っているところが多い。宿場町が多く、大名が泊まる本陣(跡)、神社仏閣、古民家や商家など歴史的な文化遺産を辿る「まち歴史の散歩道」として親しまれている。多くの場合、市民グループが「まちづくりの会」を作って、保存活動やまち巡りなどの企画・運営を行っている。

可部の町並み

玖波宿の町並み

玖波、廿日市・地御前、草津、海田、西条、可部、三次、吉舎、上下、府中、神辺、東城などがこれに該当する。

上記の中で、下線を引いた９地区は中国地方整備局などが認定する「夢街道ルネサンス」に選ばれている。夢街道ルネサンスは、歴史や文化を今に伝える中国地方の街道を認定し、個性ある地域づくりと地域の活性化を図ることを目指しており、「こまちなみ」のイメージに近い。

神辺本陣跡

竹原や**宮島**などの国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）およびそれに準ずる地区も紹介したが、それらは「こまちなみ」の定義からは少し外れている。

金沢における「こまちなみ」は、重伝建地区ほど面的な広がりや質的な純粋性はもたないが、城下町らしい、ちょっとしたよい町並みとしている。さらにそこに住んでいる人たちの生活感を重視している。古い町並みが残っていても、空き家が多くては「こまちなみ」とは言えない。

竹原の本町通り

横川駅界隈、**呉**などの商店街は戦後建てられたものだが、店舗や飲食店が集中し、その猥雑感が人を引き寄せている。尾道は北前船の寄港地で物資の集散地として栄えた商都であり、**尾道本通り**はレトロな雰囲気を残している。

今シリーズで紹介した「こまちなみ」のうち、９か所を三宅恭次氏が執筆。人情味あふれる描写にファンが多かった。ここに謝意を表しておきたい。

横川の星のみち

☆ひろしまに新たなこまちなみはつくれるか？

広島市内は被爆により一面焼け野原となったが、戦後の復興により町並みが形成されてきた。昭和５６年に広島市都市美計画が策定され、今では景観法に基づく事前の届け出が求められているが、果たして「こまちなみ」が出現するであろうか。「こまちなみ」は見た感じが良いだけでなく、そこでの生活感がにじみ出ているのが望ましい。

・**アリスガーデン**や**袋町公園**などはイベント等が開かれ、多くの人が集まる。賑わいのある広場に面する道路沿いにはオシャレな店舗が増えている。

・**並木通り**では歩道の植え込みは住民が手入れをし、所々にベンチが置かれ、オープンカフェもある。人が行き交い、落ち着いた雰囲気が漂う街並みは心地よい。

・猿猴橋の復元を機に**西国街道**が見直されている。昔の面影を求めるのは無理としても、街道沿いはゆるやかな建築協定を結んで、時間をかけて新たな西国街道を形成することは可能と思う。

・**基町ポップラ通り**は川に開かれた気持ちの良い散歩道だが、中央公園側にギャラリーやオープンカフェなどしゃれた店舗が軒を並べれば、人気どころとなるであろう。

戦後、生まれ変わった広島にも「こまちなみ」と呼べる地区が増えていくことを期待したい。

（編集委員　瀧口信二）